祖父江孝男新築の歩み

中村博司

昭和60年９月14日　屋台完成写真　六所社前にて

はじめに

桧の古木に囲まれた六所神社の境内に立ち社務所から本殿の方に目を移すと、本殿と社務所の間の山林に何か物足りないような空間のあることに気づく。

これはきっとこの空間の歴史を知っている人のみが感ずるものであろう。そこには以前、天を覆う程に枝を広げた桧の大木が立っていたに違いなかった。

一時の賑いをみせる秋の六所神社の祭典の残り香の漂う境内に佇み、時の流れと共に次第に色褪せてゆく歴史を記憶の限り引き出してみようとするのは単なる懐古主義なのだろうか。しかし、そこには忘れてはならないものがあるはずであった。長年の念願であった屋台新造に燃えた梔組の人々のはっきりとした歴史があるはずであった。

屋台新造への胎動

大正十年頃、高井包次、有谷彦七、高井保蔵らが世話人となり、大工大杉重五郎が立ち合って磐田郡二俣町車道（現天竜市）より約四十五円で買い求めた屋台は、当初両脇にこじ棒が付き、木の四輪車であったといわれ、梔組に持ち帰ってから牛車形式に改造を施した。この屋台が初めて宮口に現われた時、大八車や牛車に柱を組み立て、障子の屋根を乗せて曳いていた組が多かった当時では最も立派な屋台として注目を浴びたという。しかし、戦後生まれの私には当時の様子は想像しえない。私が物心ついてからの梔組の屋台といえば歌舞伎役者の山車人形をつけて曳いたのが印象に残っている。その頃は尚義団を除いてどの組の屋台も人形を前面に飾り、カーバイトで明りをとっていた。祭りの日になると各組の屋台に飾られる人形を見て歩くのも楽しみのひとつであった。毎年九月十五日の夜には各組の屋台が町に集結し、各会所を基点として町の中を幾度も往来し、人々は屋台と共に洪水のように流れた。夜店が道の両脇に立ち並び、そこには六所神社の祭典の最初のクライマックスがあった。そして深夜近く年番組の屋台を先頭に六所神社の坂下へと全組内の屋台が一列に並び終えると、いよいよ六所神社に屋台を曳き上げるお膳立ては揃う。各組共力酒をあおぎ、一気に坂を曳き上げるのである。誰ひとりとして力を抜くものはない。真剣そのものである。六所神社の祭典はここで最高潮を迎える。時はすでに十二時を過ぎていたであろうか。そして全部の屋台が六所神社の境内に揃ってから余興（芝居）が始められ、その時間は午前一時を回ることが多かったように思う。娯楽の少なかった当時ではこの芝居によって六所神社の祭典が北遠随一の賑いをみせていたともいえそうである。しかし、時代の波と共に娯楽の多様化時代到来の兆しがみえはじめた昭和三十六年頃を境に六所神社の祭典も次第に寂しくなり始めた。

乃組の屋台が町内曳き回し中に不慮の事故を起こしその後の祭典参加が出来なくなったのもこれから三年程後の頃で、梔組が六所神社に屋台をあげるのをやめたのもこの頃からであった。祭典の目玉であった余興は中止され、祭典運営の人が減り、屋台の曳き回しも縮少され、梔組などは十四日の宵祭りのみ曳くだけとなった。こうして暫く、笠井や都田、二俣あたりからも人を集めた六所神社の祭典も静かな時代を送るようになり、一時は尚義団と研精社の二台しか上がらない時があった程である。

先代屋台と往年の若連（昭和五十五年九月十四日・恩光寺前にて）

しかし、この間でも祭典興隆への熱意は消えていなかった。

昭和四十六年、各組の屋台が再び六所神社に集まり始めたのである。この時すでに祭典の日程が従来の十四～十六日から十四、十五両日に短縮され、屋台の曳き降ろしも十五日の昼祭り終了後に変わっていた。このような各組の動きの中で梔組は昭和四十七年、当時二十二、三歳だった私たち祭りっ子の仲間の熱意に若連の上役たちも動かされて「とにかく町まで行こう」と十余年ぶりに他町内の道路に屋台を曳き込むことにこぎつけた。これがその後の祭典の流れを大きく変える契機となった。つまり翌年には梔組の屋台が十余年ぶりに六所神社の境内に姿を現わすことになるのである。そこには実に懐しい風景が甦っていた。忘れかけていた記憶が町内の多くの人々の脳裏をかけめぐったであろう。そして祭典興隆の息吹きを確実に肌で感じ得ることが出来たに違いない。この頃から乃組では同級生の野中幸男君をはじめとする若連の一部より屋台新造の声が高まり始め、子供達のそれは並々ならぬものがあった。特に梔組の屋台が乃組の町内を往来するようになっただけに、祭典終了後の天神社の羽目板には「屋台をつくれ」の落書きがいっぱい書かれ、その興奮は想像に余るものがあった。これを抑えるために貴布禰から屋台を借りてまで二年程曳いたが、

やはり借り物ではおさまらず昭和五十一年、町民総力をあげて屋台新造を成し遂げたのである。掛塚式一層唐破風造りの新造屋台が九月十二日のお披露目で梔組の町内を練り歩く様は目にまばゆいばかりに輝き、新造を成し遂げた熱意に敬意を表わすと共に羨しくもあった。この乃組の屋台新造が六所神社祭典の興隆に大きく貢献したことはいうまでもない。そして梔組の町内のどこそことなく屋台新造の声がささやかれるようになったのもこれからである。六所神社において乃組と共に並ぶ梔組の屋台が実に哀れに見えはじめたからであった。それからというものは祭典が来るたびに町内の屋台新造への声が高まり、若連も着々と資料収集をして機の熟すのを待っていた。私も個人的ではあるがそれまでに掛塚をはじめ蒲神明宮、あるいは飛騨高山へと足を運び、確実な資料収集を行ない、昭和五十二年十月参与委員会において若連が正式に屋台新造を町内会に要望、資料に基づく具体的な予算、形状、完成目標年度を明示し検討してもらうことになった。そして翌昭和五十三年三月の部落総会に屋台新造の案を上程、審議し、満場一致をもって決議され、原案通り年番年（昭和五十六年）完成を目指してスタートを切った。尚、従来の屋台は昭和五十五年の祭典を最後に宮口から姿を消し、浜松市白鳥町で再びかわいがられることになった。

建設委員会の発足

昭和五十三年三月の部落総会で屋台新造が決定した後、各隣保から建設委員を二名づつ選出し、その年の祭典終了後若連内で予め選出していた十六名と合わせ、計二十八名で委員会を発足させ具体的な計画を検討してゆくことになった。当初時の町内会長であった磯部熊吉が委員長を兼務する組織でスタートを切ったが、それは町内会長にとって負担が大きく、また三年にも及ぶ大事業なので昭和五十四年四月、委員の中より専任の委員長に有谷研三を改めて選出した。このため町内会長は補佐役とし町民とのパイプ役を果たすことになった。こうして発足六ケ月目にして建設委員会の組織が確立し、目標に向かって力強く歩み始めたのである。その中で、西隣保選出の高井徳蔵が体調が思わしくなく途中で委員を辞退し、屋台新造に人一倍情熱を注ぎながらも不幸にして完成した姿を見ずに昭和五十五年十月、他界したのは残念であった。後任に磯部守孝が抜擢され西隣保の穴埋めを十分果たした。この間町内会長は磯部熊吉から中村春男、中村善鷹と代わり、それぞれに最良の補佐役として持てる力

を十二分に発揮され、屋台新造への影の力となった。

梶組屋台建設委員名簿

建設委員長　有谷研三
建設副委員長　天野治男　曽我　照
会　計　有谷昭一郎
委　員　高井美実　曽我和彦
曽我鷹幸　高橋染太郎
曽我喜八　高井良三
磯部守孝　高井清雄
高井岩雄
若連代表　有谷良治　有谷悦司
中村博次
若連委員　有谷昭治　天野富士男
夏目文男　高井伸市
中村健夫　曽我守男
高橋　満　磯部　充
高井健次　渥美邦彦
高井茂光　平野幸春

この組織も昭和五十五年には屋台本体担当、彫刻担当、幕担当というように細分化し、より一層の組織力強化を計った。そして昭和六十年十月六日、屋台本体完成を経ること四年。予定の付帯彫刻がすべて完成したため、委員会発足後足掛け七年目にして解散の声を聞くことが出来た。

資金作り

屋台建設にはこれでよいという具体的な予算が組めず、完成予想総額一千八百万円というのはあくまでも乃組の屋台を基本にしてはじき出した金額である。いかに少ない予算で立派な屋台を造るかというのが委員はもとより町民の総意でもあった。しかし乃組と同じような方法で造るとしても私たちにとって一千八百万円は気の遠くなるような額であった。たった百一戸の町内でかかえる額にしてはあまりにも大きすぎるように思えた。しかし、長年培われた絆と団結力でその重圧に町民がじっと耐えようとした。第一回建設委員会召集後の昭和五十三年十月より各戸毎月二千円の積み立てが始められた。集金には若連の隣保班長が歩き、毎月二十日前に会計の所に納める形をとった。しかし、諸物価高騰の折昭和五十六年完成には資金不足が予想されるため昭和五十四年の部落総会で早くも千円上積みした毎月三千円の積み立てを全戸にお願いせねばならなかった。最初二千円の積み立てが限度と思っていた私はこの話が承諾されるとは思っていなかった。だが、承諾されないと本当に困ることでもあった。とうとう部落総会では全町民の熱意と理解により四月より実施することが決まり、私は驚きと共に感謝の気持で胸が一杯になった。今日五十円の出費をお願いするにもたび重なる説得が必要な地域もあるといわれる中で、貧富の別なく毎月三千円の出費を承諾されたということは、この事業に並々ならぬ熱意と夢と団結を表わしたものだといえる。

また、屋台完成間際に内外に篤志寄附を募ったところこれまた驚くべきことで、地元から七百八十五万三千円、外部から百七十九万円、合計九百六十四万三千円という予想をはるかに越える額が集まり、これによって四百万円の借入金の返済も早期に終了し、昭和五十七年三月には彫刻の代金を含めて積み立ては予想外に早く終了することができた。

最初にはじき出された一千八百万円という数字は一体どこに消えてしまったのであろうか。最終的には屋台小屋も含めて二千五百九十万円余りの浄財がこの事業に投じられたことなどまるで嘘のようである。時の流れの中で心をひとつにするということはこんなにも素晴らしいものだということをしみじみ実感した。

会　計　報　告　書

収入の部

積立金	11,279,000	1戸当り　112,000
特別寄附金	9,643,000	町内　7,853,000　町外　1,790,000
先代屋台売却代金	900,000	
貯金利息	287,141	
借入金	4,000,000	
祝儀	12,000	
合計	26,121,141	

支出の部

屋台小屋	2,755,314	照明電気工事	260,000
欅材代金	2,167,000	先導車	116,000
桧材代金	435,000	晒	38,000
製材挽賃	213,560	小計	1,704,000
車輪及び舵金具	2,195,000	諸費　屋台組立祝い	98,780
彫刻代	5,200,000	大工祝儀	80,000
装飾金具	1,000,000	落成式費用	296,600
大工作料	4,000,000	手拭100本	15,000
不足材料	700,000	発電機リース代	10,800
借入金返済金	4,043,539	記念写真代	93,520
小計	22,709,593	郵送料及び礼状	12,980
備品ロープ	89,000	火災保険1400万	50,000
提灯	151,000	雑費	831,125
大提灯	50,000	小計	1,488,805
天幕	400,000		
見送り	300,000	合計	25,902,398
シート2枚	300,000		

差引残高　¥ 218,743 は

S 60. 10. 14 若連会計へ渡す。

材料の調達

日本は山国といえど堂塔や屋台に使用する大材が民有林はもとより国有林でさえ一握りしか残っていないといわれる。ゆえにその稀少価値は年を追うごとに高騰し、なかなか入手困難となった。材料の確保は屋台建設の第一条件であり材料費が全費用の半分を占めるといわれる現在、良材をいかに安く手に入れるかによって全費用の大幅な軽減につながることは一目瞭然である。又材料の吟味であるが、堂塔材料の構造材は同じ土地で育った同一年代のものがよいとされる。それは同じ年代、同じ所で育った木を組み合わせれば無理がないというわけで、若い木と古い木を組み合わせたり、深山の木と平地の木を組み合わせればどちらかが必ず痛む。それは丁度一つの騎馬を老若男女で作るのに似ている。屋台のような動くものには粘りのある木が適するわけで、特に天竜材がよいといわれる。しかし予算的にみて丸太が十分あった昔に比べて材料を吟味してまで造る余裕はなく、ただ都合のつく材料で造るしかないというのが偽らざる事実であった。栀組の屋台の材料構成は力のかかる所に欅材、その他は桧材を使用することで進められていたので、まず最初に土台や柱、彫刻に使用する欅材の購入から手がけられた。近年新建材の材料として木端まで使用し尽くす傾向にある欅材は枝下が長くとれず、太く真っ直で長いものは名古屋木材市場で一本六千万円の値段がついた例もあるといわれるようにその稀少価値は驚くばかりである。昭和五十四年五月二十一日と八月九日の二回に分けて必要な欅材の総てを名古屋市中区にある梶浦商店より購入。一回目は主に柱、土台、駒寄せを取る予定で長物二本を購入した。そのうち一本は途中から大きな枝が出ていてそれがなければ五百万円は下らない代物であったが、枝のために格安で仕入れることが出来、七月二十七日西鹿島の大昭製材で割った以後も狂いの少ない良材であったことは大変助かった。二度目は一回目の不足分として主に彫刻用を購入した。こうして欅材は用意出来たものの、末口二尺二寸なくては唐破風が取れないという桧の大材をどこで手に入れるかが一番の難問題であった。構造材として使用するには天竜材が合っているが天竜川水系の民有林にはわずかしか残っていず、その値段すら見当がつかない。当初の予算は材料をすべて購入するという前提ではじき出されたが、あまりにも高額で一戸当りの負担が増大することは必至であった。しかし残された方法もないわけではなかった。むしろ私たちは次

の方法に望みを託した。昭和五十一年、乃組が六所神社の桧を譲り受けて屋台を新造した例があるためできるならこういう方法で確保できないだろうかということであった。私たちはこの件で幾度も会合をもつことになった。六所神社の桧は平地に立っていて油分が強く、粘りがあって屋台の構造材には適している。丁度折りしも宮口には梔組をはじめ段組、井組、あ組と四組に屋台新造の話がもち上がっていた。どこも屋台が老朽化してきた地区ばかりである。そこでどの組も梔組同様に材料調達に苦慮しているであろうと思い、各組に六所神社に桧材の提供を一丸となって申し出ようと声をかけたところ、すでに発注していたあ組を除いて各組とも協力をとりつけることが出来た。これまでに梔組では氏子総代である曽我良一を通して神社側の考えを打診してきたが、昭和五十四年四月五日、梔組、段組、囲組の建設委員や若連代表が六所神社を訪ね、桧材の提供を正式に依頼するまでにこぎつけた。しかしその後、段組と囲組は新造時期や委員会の方針で桧材の享受を辞退し梔組だけがその対象として残ることになった。そして十月一日には氏子総代会において山林部の桧二本、根回り約二・七メートルと二メートルのものの伐採許可をいただき、桧材の調達に明るい見通しがついた。

伐採計画は桧が水を下げた頃を見計らって立てられ、人員の配分及び伐採方法について慎重な検討が加えられた。伐採には十月十三、十四の両日が当てられ、いよいよ伐採の当日、時の町内会長中村春男の本殿参拝後、山仕事の経験をもつ副委員長天野治男の指揮に従い建設委員総出で指定の桧二本を切り倒す段取りをつけた。まず細い方から倒すことになった。幸い細い方は無理なく倒すことが出来たが肝心なのは唐破風用に譲り受けた太い方である。木は幾分斜面に立っていて倒し方によっては民地にかかる恐れがあるため、ロープ掛けは入念に行なわれた。十分な下準備の後倒す方向を決めると根元にひ

六所神社の桧材伐採　　昭和54年10月13日

び割れが入らぬように一気に倒された。途中手前の桧に枝がかかったものの地響きをたてて倒れる光景は実に荘厳であった。樹齢約三百五十年の桧の運命がこの時決まった。今まで薄暗かった桧林にオレンジ色の陽光が降り注ぎ、大木の存在をはっきりと教えてくれた。桧の大木が地面に横たわるとそれまで張詰めていた緊張感がプツリと切れて疲れがどっと皆の肩にのしかかってきた。割れが入ったらどうしよう。腐りはないだろうか。民地の方に倒れないだろうか等々、人それぞれに心配していた。しかしこうして無事倒された二本の桧は心配された腐りも割れもなくその日のうちに使用目的別に分割された。すなわち、太い方は元から四尺をあて逃げを含めて化粧垂木材用に、その上十一尺を唐破風材として分割。又細い方は元から十四・五尺を長手材（茅負、裏甲、棟木、桁）用に、その上六尺を虹梁材用に切断してその日を終えた。翌十四日には若連総出で分割された桧材の運び出しが始まった。搬出には委員から提供されたトラックを山林に引き込み、チェーンブロックを使ったり、コロを木の下に敷きテコで桧材の先を起こしたりして皆額に汗を光らせて頑張った。作業は予想以上に手際よく進み、汗の吹き出た顔と顔は屋台への夢で明るく輝いていた。午前中で桧材の搬出を終えると、午後からは二班に分かれて屋台小屋の材料として松材を寺山に、杉材を区管理林の田光山にそれぞれ求めに向かった。私は田光山に屋台小屋の柱材用として杉材を切り出す方にまわった。田光山の谷底には樹齢三十五年を過ぎた杉材があり、なかでも太いものを伐採、十八尺に切って運び出す。しかし谷から道路まで運び上げるには七十度近い傾斜地を引っぱり上げねばならず、思案の末、トラックからワイヤーを引っぱり滑車を利用する方法がとられた。この方法で杉材の搬出は思ったよりスムーズにゆき、夕方には桧材同様、寺山の松材と共に委員の曽我鷹幸が提供してくれ

倒した桧材の搬出
昭和54年10月14日

た私有地に保管することになった。寺山で伐採した松材は皮を剥いで虫の入るのを防いだ。又桧材は木口割れを防ぐためボンドを厚く塗布した。こうして翌五十五年十月二十六日二度目に購入した欅材と一緒に西鹿島の大昭製材にて製材するまで自然乾燥すること約一年。この間、台風二十号の襲来に合い雨合羽姿で材料置場の固定や仮屋根の補修をして材料を天災から守り続けたことも忘れてはならない。十月二十六日は約一日がかりで製材が行なわれ、唐破風用として割った木から大きな節が二つ程出て皆を心配させたが、大工が埋木をして補った。これを惜しむより接ぎなしで唐破風が二枚とれたことを喜ぶべきだろう。原木は賭けのようなもので割ってみなければ良材の判断が出来にくいことが実感され、各部分に小割りするにも木目を考えながらしなければならず、経験による判断がかなり要求される。結果的には製品部止まり約六十パーセントで並材であった。原木からの製材はこれで終わりあとは先の欅材と平行して大工にノミを入れてもらうだけとなった。こうして幸運にも六所神社の理解を得て貴重な桧材が格安で入手できたため、材料費は大幅に軽減され屋台新造への夢は一段とふくらんだ。

トラックに積まれた屋台の桧材料
昭和54年10月14日

屋台大工の選択と形体の決定

屋台、山、鉾、山車、だんじりと日本各地にはいろいろな山車（だし）の呼び名がありその形体もまちまちである。一般には屋台の起源は平安時代とされているようだが、移動神座という考え方には変わりないように思う。一層唐破風構造の屋台は遠州地方でも天竜川以西に多く、天竜川を渡ると森、掛川のような二輪の山車が多い。宮口では昔、二層式の屋台を引いていた組が多かったが、昭和六年、研精社が一層唐破風の屋台を新造してから翌七年に津久美、二十三年に新興社、そして二十七年には尚義団と一層唐破風構造の屋台が多くなり、近年に到ってもこの傾向が強い。私の幼い頃、「屋台」といえば真っ先に浮かんだのがこれらの四輪内車形式の屋台であった。なぜなら、三支点の牛車形式の梔組や乃組などは常に憧れの的でもあったからである。今でこそ研精社は少し小型に見えるが、新造当時は町内をくまなく曳き回せるようにと考えて大きさも方向転換の方式（屋台の中央にとりつけたジャッキによって一旦屋台を持ち上げ、方向転換する方法）も決めたといわれる。町の通りや屋並みの状態で屋台の形体が決まったのはどの地方でもありえたことである。遠州地方の屋台の原形は竜洋町掛塚の屋台の影響が多分にあると思う。掛塚では以前二層式の屋台を曳いていた時代があったが、たび重なる大火で焼失し、現在江戸時代から伝わる一層唐破風式の屋台が八台残され、屋台芸術の最高峰とも称されている。

私は彫刻、形体共に均整がとれ街並みに合った屋台にいつも魅了されてしまう。私と掛塚屋台との出合いは昭和四十七年に逆上る。仕事上のふとした事で一枚の記念

掛塚貴船神社祭典
昭和49年10月5日

写真を見て感動し、その翌年から秋になれば見えぬ糸に引かれるように足を運ぶようになった。掛塚の屋台には私の心をつかまえて放さない不思議な魅力があったことは確かである。「屋台祭りの心」が躍動していた。緩急のあるお囃子、豪快、勇壮な曳き方、毎年祭典前に組み立て、祭典後に解す。これらは私の目に新鮮に映り、かつ又たまらない魅力であった。宮口でも掛塚のようにホイールベースを縮めればロープのみの方向転換が容易に出来るのに、研精社以後造られた屋台はなぜか四輪ジャッキ式を採用している。これは四輪揃っている魅力を残しつつ方向転換を楽にしようとしたからであろうが傾斜角七度の参道を曳くにはホイールベースを縮めるわけにはいかなかったからとも考えられる。

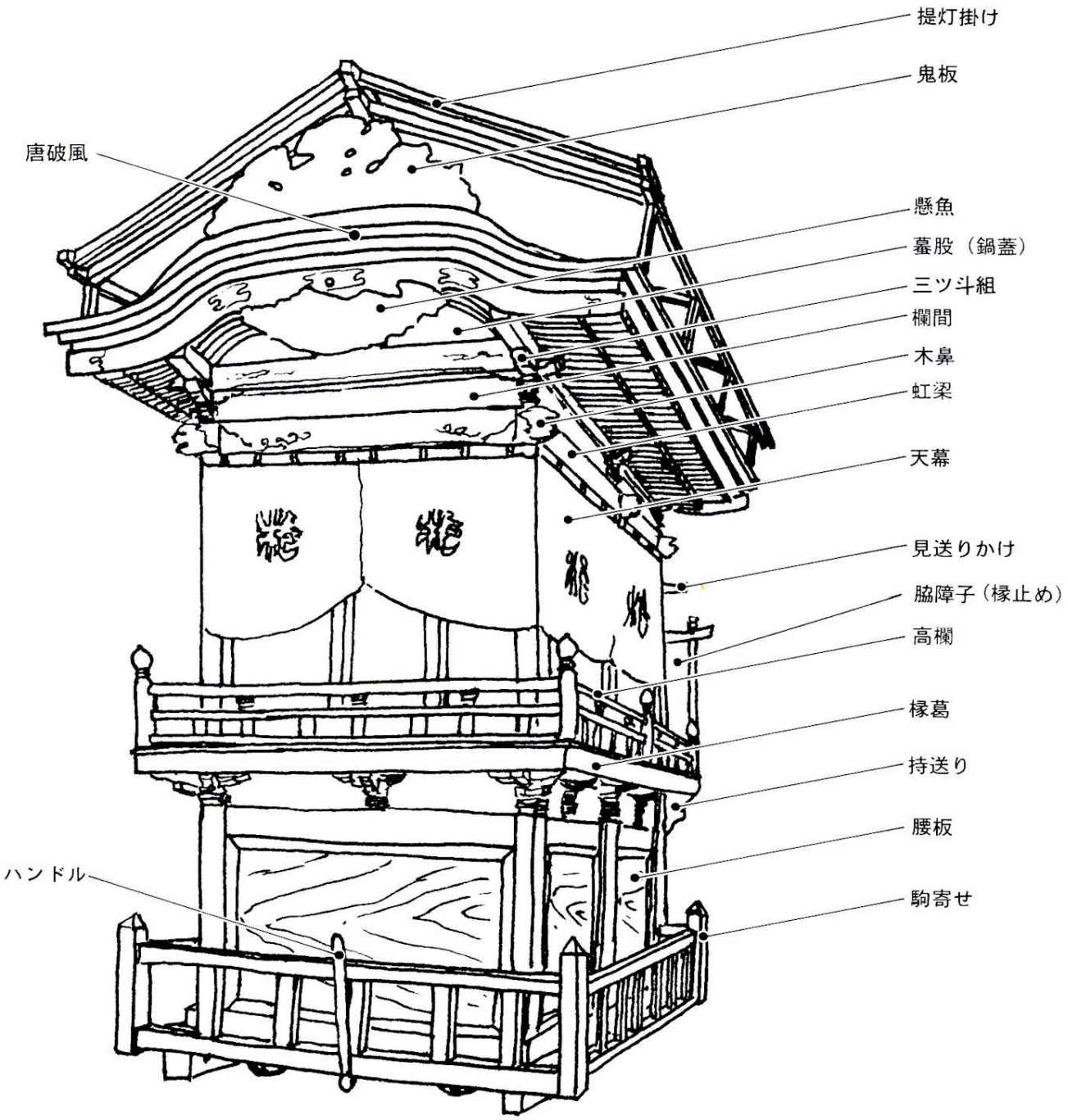
一層屋台の美しさは唐破風の形に代表されるように祭典が終わってからも唐破風の形は忘れることが出来ない。従って屋台大工の選択は重要な問題であった。昭和五十四年二月十八日、建設委員一同は大工三獄一郎氏の手による笠井第一町内会の完成直後の屋台と昭和四十六年、大工故小池佐太郎氏の手によって完成された浜松市植松町の屋台を地元町内会のご好意で見学させていただき、当日の午後、委員会を開いて資料を元に検討し大工を乃組の屋台を手がけた小池清氏に決定した。小池清氏は掛塚屋台の流れを伝える現役の大工で、その作風は父、小池佐太郎氏の唐破風より幾分箕の甲が高く、軒付も長い。乃組が新造を依頼した時、掛塚式を勧めたそうだが六所神社の坂を見て四輪内車ジャッキ式を呑んだといわれる。こうして乃組もジャッキ式を採用したため梔組の形体もほぼ乃組同様の線で確定しつつあった。しかし昭和五十四年十月、同大工の手によるハンドル装置付内車の屋台が浜松市上新屋町に完成し、蒲神明宮の祭典で引き出されるそれをみてジャッキ式の採用を考え直す意見が出始めた。また翌五十五年にも将監町で同大工による同形体の屋台が完成。この二台の屋台を見る限り、ハンドル装置なしに比べて土台の地上高が十センチ程高くなっていることが全体のバランスに大きな影響を及ぼしていないのを確認し、形体と機能に十分検討する価値があった。これが当初の流れを大きく変えるものとなり、昭和五十五年九月、六所神社の祭典に大工を招いた折にハンドル装置の検討を勧められ、十月十六日の夜、若連全員出席の場で大工の立場からジャッキ式とハンドル装置付きの利点欠点を聞いた後、全員投票によってハンドル装置付きに変更することを決定した。この時の票差は私の予想よりはるかに大きなものであったのに驚いた。と同時に時代の流れの一面を見たような気がした。それまでの四

浜松市蒲神明宮祭　植松町屋台
昭和55年10月11日

輪ジャッキ式への憧れは神座という頑固さを保ちながらいわゆる〝お祭り〟がやれたということもあったが、その際の車輪にかかる負担は大きい。それに比べハンドル装置付きはホイールベースを長くとれるため安定性があり、容易に方向転換が出来るという利点があった。ハンドル装置付き決定後、車輪の発注先である天竜市山東の和田木工へその旨を伝え、前輪の直径一尺五寸、幅二寸、後輪の直径三尺三寸、幅三寸、鉄車の厚み四分、後輪のみ板車で再発注した。後輪の直径を三尺三寸としたのは内車にして見かけ上四輪のイメージを残すためでもあった。後輪の板車は安全性を重要視したからである。その後、乃組では昭年六十年九月、四輪をこじるにはあまりにも長すぎるホイールベースに耐えかねて解体修理を兼ねてそれまでの四輪ジャッキ式からハンドル装置付きに変更を余儀なくされた。

当初屋台の大きさは乃組並みとしてきたが材料に余裕があったため最終的には乃組より三寸広い間口五尺三寸とした。これは化粧垂木の寸法を基本として出すので全体の大きさもその割りで大きくなり、どっしりとした立派な屋台となった。又、六本の通し柱を高欄から下を三寸六分、上を三寸として意匠的にも屋台をより優美に仕上げ、下部に重量感をもたせた。これは私が屋台新造に参画させていただく以前から希望していたことでもあり、委員の熱意も大工に伝わり良材にも恵まれて実現することが出来たのである。

梔組屋台各部名称



この屋台の形は掛塚の坂田歌吉、小池佐太郎の流れをくむものです。現在は小池清がそれを伝えています。

彫刻師の選択と変更

屋台にとって彫刻は屋台をより重厚なものにするものとして欠かすことができない。この分野では昔から左甚五郎の話が有名で歌舞伎になったりしている。彫刻とは一種の芸術でありこの分野の語り話は各地に残っている。しかし彫刻の需要が減り出した高度成長時代から後継者が後を断ち、住宅欄間で全国的に有名になった富山県砺波郡井波町は別として、遠州地方はもとより全国的にもこの道の職人が数える程しかいなくなってしまった。住宅欄間と屋台彫刻ではおのずと彫り方も構図も違い、屋台彫刻にはそれなりの世界がある。幸い遠州地方には屋台彫刻の逸品が現在も多く残っていて祭典の折には目にふれることが出来る。日本は木の文化といわれるように神技ともいわれる彫刻が各地に残っているが、この辺では竜洋町掛塚に諏訪の名工、立川昌敬の作品が残っているのが有名である。梔組では屋台大工決定時に彫刻師の選定も平行して行なわれた。その中で名古屋彫長の流れをくむ名古屋市中区在住の岩田新之助氏（号・冬根）、浜松市元魚町在住浦部一郎氏（号・清風）、愛知県半田市在住新美茂登司氏（号・二代目彫常）らなどの名前があげられたが、いずれも高齢で名人といわれ岩田新之助氏はすでに仕事が出来ない状態であった。それにこの分野の資料が乏しかったので大工の紹介に委ね、大工は安城市在住で中山系の流れをくむ新進の彫刻師鈴木嘉一氏（号・秀雲）を紹介し、昭和五十四年五月二十一日、一回目の欅材購入に行った折に鈴木氏宅を訪ねたが生憎本人不在で面識を得ることが出来なかった。当時、浜松市上新屋町の屋台彫刻を製作中でその木鼻の大きさにはびっくりした。具体的な予算と厚さは二度目の欅材購入の折

製作途中の背面鬼板
昭和54年２月22日

に再び訪れて話し合い、それぞれの図柄について検討していただくために同年九月十五日、六所神社の祭典に彫り師を招き各組の屋台彫刻をみていただいた。当日、図柄は宮口にないものを彫っていただくことにし、梔組の彫刻は鈴木嘉一氏に委員会として正式に依頼した。しかし同年十月、同彫刻師による彫刻が上新屋町の屋台に、又翌五十五年には将監町の屋台に完成し、その出来栄えを見て私は内心がっかりした。末代残すものにするには再検討を加える価値があるように思えた。独断ではあったが十一月十六日、今まであまりにも資料が乏しく、名人ゆえ条件が厳しいであろうと予想していた地元の彫刻師、浦部一郎氏へ仕事の打診をしたところ、幸い大きな仕事も入っていず「津久美以来、五十年ぶりに宮口の彫りをやらせていただけるなら光栄」との返事をいただいた。この旨を委員長に伝え、一週間後に安城へ彫刻の材料を運ぶ予定を控えた十一月二十二日急きょ委員会を召集していただき、私が浦部氏から借りてきたいくつかの写真で作品の出来栄えを検討した。作品の質はもとより、場所の条件や予算面でも十分折り合うことがわかり全会一致で彫刻師の変更を決定した。将来幾世代にもわたって残すものを彫っていただくには、浦部一郎氏を無視するわけにはゆかず、十一月三十日、鈴木嘉一氏との約束を白紙に戻したのである。私は義理、人情でというより「良いものを残したい」、この一念が彫刻師変更の勇気となって現われたものだと思う。それは勇断であった。彫刻師変更に伴ない彫刻用に木取った材料を早速浦部氏宅に運び、一刻も早くノミを入れてもらえるよう依頼した。その図柄については鬼板懸魚に加藤清正の虎退治や足柄山の金太郎が出されていたが、木質と木目を考えた彫刻師の意志におおむね任せるという形をとった。大体において彫刻師は昔から絵の腕もあったようにデッサン力がなくてはいいものが彫れない。浦部一郎氏は白紙に薄墨で下絵を画いてから木に移してノミを進め、彫って

脇障子製作中の浦部一郎氏
昭和57年3月28日

削りとられたところは再び画き込みながら彫り進む。梔組の鬼板は過去に手がけたもののどれよりも大きなものだろうという。五十年ぶりに宮口の屋台彫刻が出来るとあって作品に傾注する情熱は一種特別のものがあるようにみえた。構図を幾度も練り直し念には念を入れて昭和五十六年早春、最初の彫刻、加藤清正の虎退治が姿を現わす。そしてもう一対の鬼板懸魚に恵比須大黒と鶴亀が姿を現わすには実に十ケ月を要した。しかも八月二十九、三十日の晴れの新築披露にはまだ一部荒彫りの状態でとりつけ、六所神社の祭典にはこれに鍋蓋が荒彫りの状態で追加された。祭典終了後彫刻をはずして仕上げのために再び浦部氏宅に持ち込み一振りでも多くこなしてもらえるよう配慮した。翌五十七年の祭典には六個の木鼻と脇障子、それに前後の欄間が一部荒彫りの状態でつけられるまでになった。が、その後五十八年に入ってからは遅々としてノミが進まなくなり、委員の頭を悩ませることになった。しかし悩んでいるのは委員だけでなく彫刻師自身であったのに気付いたのは祭典を四ケ月後に控えた五月である。原因は木鼻同様材料にあった。見るからに堅そうな色と幅の広い木目。彫刻に向いているとは到底いい難い材料に製作意欲が萎えていたのであった。

「自分の納得できる彫りをするには材料を交換するしかない」の結論に達し、彫り師自らの負担で二本の欄間の材料を交換。日数の少ない祭り前を欄間彫りに日夜ノミを入れることになった。木彫は木目を生かして彫るところに良さがあるのであって木目を生かして彫れる人が真の彫刻師である。そうした意味で浦部一郎氏は木心をつかんだ彫刻師といえよう。

昭和五十七年三月ですでに積み立てを終了した町内には一刻も早く彫刻の姿を見たい人が多く、委員による説得も年を経るごとにその力を失い、一部には諦めムードさえ感じた。しかし、屋台本体完成から四年後の昭和六十年九月、残された腰彫りすべてが完成し、当初の計画通りに完成した屋台を初めてみることが出来た。その完成品は職人気質をありありと感じさせる見事な出来栄えで、待ち遠しかった歳月も完成品の前では消えて無くなる程であった。

梔組屋台彫刻

正　面　鬼　板（4寸）

恵比須、大黒が漫才（万歳）を演じている。大黒天の扇子には「梔」の字を配し、組を祝っている。

正　面　懸　魚（3寸）

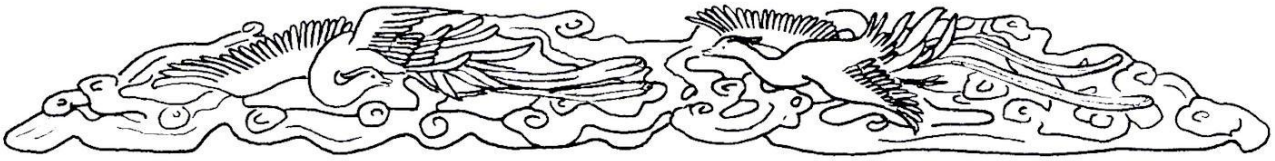
恵比須、大黒の漫才に合わせて鶴亀が「祝いの舞い」を舞っている。

背　面　鬼　板（4寸）

加藤清正の虎退治

背　面　懸　魚（3寸）

子供を安じて駆け寄る親（母）虎

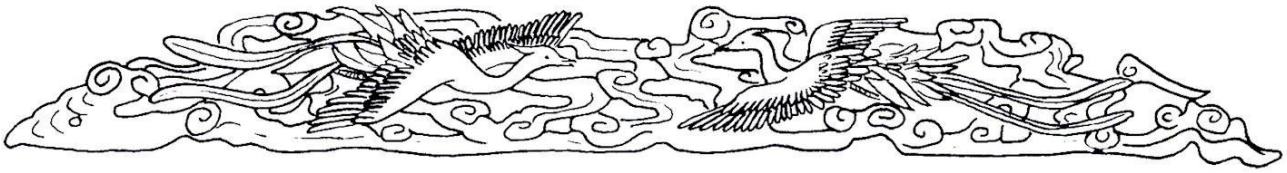


正　面　蟇　股　（鍋　蓋）（1.5寸）

中国伝来の架空の鳥で目出たい時に出る尾長鳥が彫ってある。

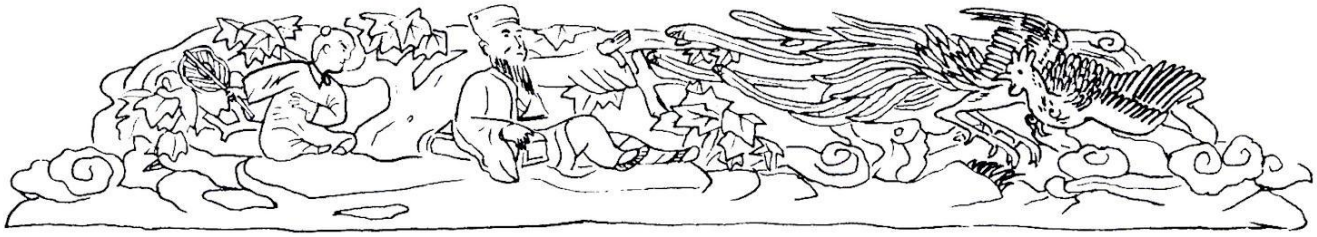
正　面　欄　間（3.5寸）

須佐之男命の大蛇退治。須佐之男命の後の妃、奇稲田姫が
主人の無事を祈っている。



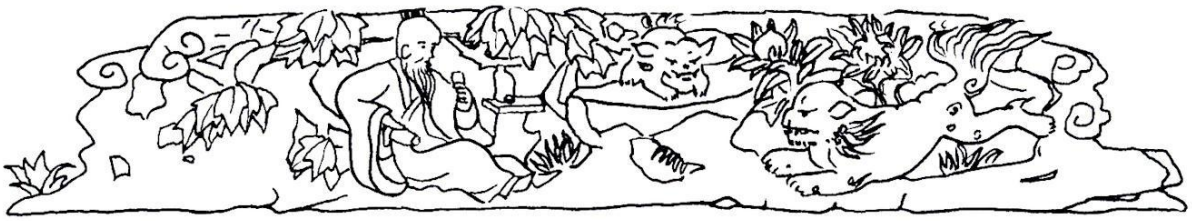
背　面　蟇　股　（鍋　蓋）（1.5寸）

中国伝来の架空の鳥で目出たい時に出る尾長鳥が彫ってある。



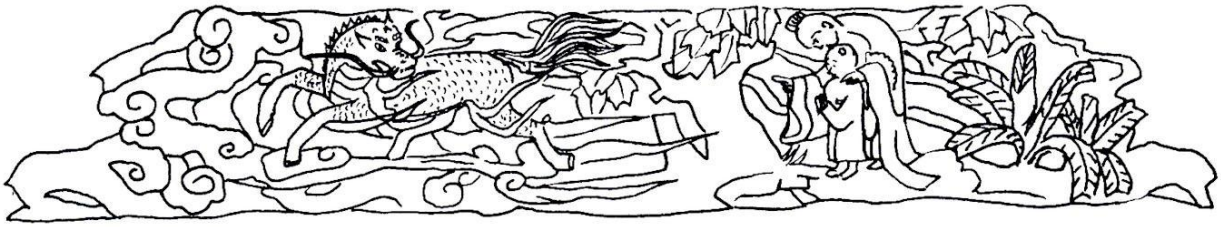
背　面　欄　間（3.5寸）

中国の梅福仙人が小使い少年の前で鳳凰を招いて遊んでいる。



右側面前方欄間（3.5寸）

あらゆる仙術にたけた後漢の仙人、張道陵が獅子を手なづけているところで、仙人のやさしい一面を表わしている。

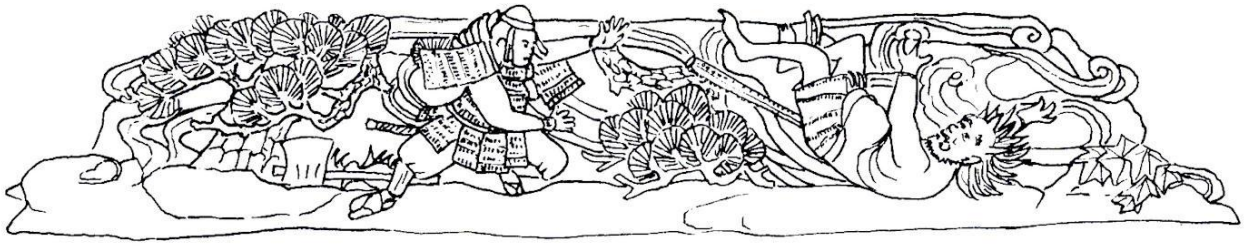


右側面後方欄間（3.5寸）

麒麟を尊ぶ中国の貴婦人が我が子に麒麟の尊さを教え諭しているところ。
優秀な子を「麒麟児」というのはここから出た言葉である。

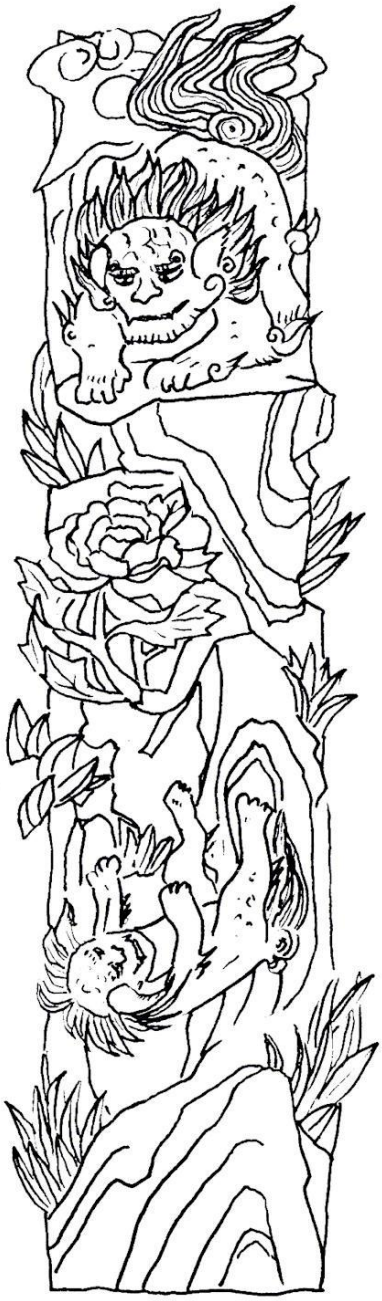
左側面前方欄間（3.5寸）

大国主命が庶民に危害を加える荒鷲を退治して、武勇にもたけた政治家の一面を表わしたもの。



左側面後方欄間（3.5寸）

坂田公時と名乗って頼光に仕え、大江山に乗り込んで鬼退治をした金太郎の出世の姿。



脇　障　子（2寸）

獅子の子落し。獅子として生まれた以上、一度は経験せねばならぬことを親が子に試練しているところ。

脇障子の背面は透彫の技法を用いて鷹と熊がそれぞれ彫ってある。

木　鼻　唐獅子、四隅は振り面とし豪華さを出している。

腰　彫　り　十二支

照明について

照明は夜の屋台の命ともいえる程重要なもので、その良し悪しによって夜の屋台が生きも死にもする。時代の変遷と共にローソクからカーバイト、バッテリー、発電機へと変わる世の中で、宮口にはどんな方法がふさわしいかというのも検討理由のうちであった。しかし私たちの根本的な考え方は、いかに屋台を傷つけず格好よく照明する方法はないだろうかということであった。梔組も昔はローソクで明かりをとった時代もあったと聞く。カーバイトやバッテリーの時代はついこの間までだったように思う。そして従来の屋台は彫刻がなかったのでブラ提灯の数が四十余りもあった。が、今度は彫刻が入るし、それを見ていただかねばならない。とすると、提灯の数は半分ぐらいに減らしたい。こうなると電源はおのずと発電機の採用ということになるが、提灯の数、使用電球、照明方法は蒲神明宮の祭典が参考になり、中でも植松町の屋台照明は大変参考になった。結局ブラ提灯は片側十一個、計二十二個で四十W球を使用。鬼板懸魚用スポットに百五十W四灯、欄間のサイドスポットに百W四灯。懸魚裏側に七十五Wシールド球四灯。高欄前面には四十W球十五灯と駒寄せ土台に五十W球五灯といったところが主な照明である。掛塚では今でもローソクを使用しているが、その土地土地に合った照明の仕方があるように宮口にも馴染む照明も頭の中に入れておかねばならなかった。

照明の検討と平行して新造を機会に提灯のデザインを一新したいという話が委員会でもちあがり、デザインは私に「一任したい」というのである。その道を少しかじったとはいえ私は恐縮した。以前のブラ提灯は浜松市笠井町の大屋（寺田弘吉氏）がデザインしたもので、もみじにくちなしの変体仮名が提灯をとりまいていた。それにはそれなりの味わいがあり、この歴史を一新するのはこれまで馴染んできた歴史の重圧感をひしひしと感じた。とても軽々しく受けられるものではなかった。しかし委員会の雰囲気は私一辺倒になっていて断われる状態ではなかった。有難いと思った。そこで私は幾つかの試作を委員会に提出して、その中から決定していただくことにした。提灯のデザイン一新は、新造を機会に昔の殻から脱皮したいというのが委員会の総意であったように思う。

梔池の地理上の歴史をたどると梔子の花はこの地になんとしっくり馴染んでいることか。今でも田植えの頃になると一ノ辺田あたりに一重の梔子の花が咲き、以前の

男池（現浜北西高校）やその西に位置していた女池のほとりにもいっぱい咲いていた面影を残している。風車を思わせる白い清楚な花と橙色をした六角形の実を幾度となくスケッチした。なぜかこの梔子の花の中にデザインのモティーフを見つけだそうとしたからであった。しかし思うようにいかず、最終的に絞った二点、つまり梔子の花をデザイン化したものと「梔」の字を「久」の字でとりまくものを笠井町の大屋に試作を依頼して、昭和五十六年三月、総会後の委員会の場で実際に火を入れて明

梔子の花のスケッチとブラ提灯図柄

かりの通り具合をみた。前者は明かりを入れない時の方がよく、後者はこの逆であることがわかった。いくらデザインが良くても明かりを通さねば提灯の役目はゼロに等しい。また一個だけを吊す時はないので凝った柄よりシンプルな方がよく、又明かりもよく通る。以上の点から後者のデザインに決定した。デザインの意味は、丸い「梔」の字をひら仮名の「く」の原形である「久」の字で取り巻き、人々が手をつなぎ町内の和を表わしたつもりである。又、「久」の下面を「梔」の下面に合わせて下から見上げる時の修正を計った。一方提灯の吊るし方についても①屋根裏配線で化粧垂木の間から吊るすか、②提灯掛けから軒より外に吊るすか、③従来のように化粧垂木の下に配線してそこから吊るすか、といろいろ案が出された。それぞれに利点欠点があり。宮口での新しい方法には勇気がいったが最終的には②の方法に決定した。なぜなら、屋台を出来る限り傷つけたくないという委員会の基本的な考えに合っていることと、化粧垂木の美しさを見せることが出来、欄間と提灯の間が広くあくため夜でも彫刻がよく見えると同時に屋台の幅がより広くみえる。そして昼間は提灯を屋根に上げ、彫刻及び屋台の素建ての美しさを見せられるのもこの方法しかなかったのである。また練り提灯を前面高欄に十五個並べた他、

前面の両側に「梔組」の長ブラ提灯をつけたが、振り面の木鼻と虹梁の浮き彫りが隠れる欠点があり私は感心しない。植松町では新造以来この長ブラ提灯をつけず曳いていたが、昭和五十六年から二年つけて再び廃止した。元建設委員の稲垣正紘氏は「浜松祭りのように観光化され、屋台の台数も多い地区にあっては町名の表示も必要であろうが、どこの屋台か識別できるわずか十数台の屋台祭りに長ブラは必要ない。また屋台の素建の美しさがそれによって損われる」として長ブラ提灯を吊すことには否定的だ。私もこの稲垣氏の意見に賛成である。

この他唐破風、欄間、腰彫りを照らすスポットの方法は異常にけばけばしくなくてより栄えるように工夫し、浜松市西塚町の東北電機工業所が電気配線を担当した。配線は出来る限り屋台を傷つけないように、そして解体する時のことも考慮してすべてコンセントで繋ぐ方法をとった。又、電源の供給方法は先導車に発電機を載せ、リード線で屋台のコンセントに継ぐ方法をとった。これは発電機がかなりの熱を出すため屋台の床下に入れることは火災予防上好ましいことではないのと、発電機をリース会社で調達するためでもあるからで音が改善されれば一番安全な方法であろう。しかし、前面から屋台の全容をみるにはこの先導車が邪魔になり乃組や津久美のように屋台後部に電源供給部として継なぐ方法の方が曳きまわす上でもコンセントが抜けるというような無理がないように思われる。また先導車がなくても梔組の屋台は遠くから一目遼然識別できる点からみても先導車方式は十分検討する余地があるように思う。昭和五十七年より殆どの組がこうした発電機の採用に踏み切り、宮口の屋台の照明方法もがらりと変わった。ここにも時代の流れの一面をみることが出来る。

幕・金物について

屋台本体や彫刻にはお金をかけても幕や飾り金物になるとすでにその意欲は失われて、一時凌ぎ的な考えで取り扱う場合が多い。が、実際資金面でもこの辺にくると底をつき始めるのである。梔組ではこの二の舞を避けようと当初から天幕、見送り、飾り金物等の装飾品に関する予算をはじき出して取り組んでいた。まず天幕である。千年来の歴史と伝統、神の依りしろ、移動神座としての神秘性、私たちが抱いた神観念の具象化のひとつを祝ったのが屋台祭りの原点であろうといわれる。ゆえにその色は断然赤、もしくは紅白が多い。特に高山では天幕といわず単刀直入に緋幕といっていることからも想像され

よう。つい先程まで梔組では紫を使用していただけに色の決定に少し時間を要したが、最終的には赤と決め外幕とした。この巻き方は基本的なもので、内幕にするのは屋台や山車がさらに装飾化された時である。天幕も昔から装飾品のひとつで豪華な刺繍を凝らしたものも多いが、贅を尽くす程の余欲のない梔組では前面に直径四十センチの「梔」の字を二つ、側面に直径五十センチのものをそれぞれ二つづつ入れることにし、生地はシオゼハブタイで発注先は段組、囲組と同じ浜松市尾張町の河合ぬい屋である。又、新設した見送りであるが、人は誰でも正面を重視しがちで後ろや裏のことは案外なおざりにしがちである。しかし、そういうところを大切にすることは大事なことで、特に屋台などは正面の印象が強く、後ろ姿などは殆どの人が覚えていないであろう。その昔、高山では車軸に木を使用し、木と木がこすれてギーギーと出る音を楽しんだという。そしてゆらゆらと揺れて曳かれる屋台の姿に町民は風情を感じた。又、過ぎ去る屋台の後ろ姿をいつまでも見送っていた。「見送り」という言葉はこうしたことから生まれた。屋台は女性に例えられることが多いが、後ろ姿の美しいのはまた格別の印象が残るものである。見送りも天幕と同様河合ぬい屋に発注。原図は日光東照宮拝殿、将軍着座の間にある彫刻大工、和泉忠兵衛義一が欅の一枚板に描いた寄木細工の鳳凰からとったものであるが、その意が十分に反映されなかったのが残念である。欲をいえば長さも上部ゲタ箱位までとする方がよかったように思う。又、天幕の上部黒帯は屋台を二分する感を受けやすく、鉤を含めて天幕と同生地の赤とした方が白木の屋台には合っていたように思う。

一方飾り金物は当初乃組と同程度としていたが、すでに同程度の金額及び材料で受ける所がなく上新屋町、将監町と同じ愛知県岡崎市の小滝仏具店（小滝欣作氏）に昭和五十六年一月二十五日発注。垂木鼻を除く金物はすべて屋台本体完成後、白紙にて金物のつく所を画き写し、それを元に製作が進められた。化粧垂木鼻、前後唐破風中央、土台正面にはそれぞれ「梔」の字を打ち込み、土台後部には新原の河合淳三氏筆による組名を入れた。本来、屋台のようなものの装飾金物は宮彫金師のするのが筋であろうが、そう贅も尽くせず、金物の材質も銅板に純金メッキ仕上げとしたのが精一杯であった。ちなみにその厚さは、垂木鼻が〇・四ミリ、その他は全部〇・六ミリである。

屋台小屋について

屋台小屋は屋台を年中保管する上でその造り、構造が吟味されねばならない。扉まで厚さ二尺の土壁で外部の湿気を遮断している高山の屋台蔵は別格としても、屋台を最良の状態で保管するにはこれ位の神経を払う必要がある。新造の屋台は従来のものよりふた回りも大きいので従来の屋台小屋では到底間に合わないことがわかっていたため、新造屋台に合う屋台小屋の新築計画が屋台と平行して検討された。まず場所の選定からで、従来の場所では雑木が邪魔になり広場もとれず、又そこは以前墓地であった。丁度、高井一が恩光寺から借用していた土地があり、恩光寺と高井一の了解を得てその土地を利用させてもらうことになった。しかし、茶の木や植木類が植わり荒れていた土地はすぐ小屋が建てられる状態ではなく、昭和五十四年九月十六日、若連総出でそこを整地せねばならなかった。そこには氏神様も新築されることになり、おのずと屋台小屋の大きさ、向きが限られた。材料は昭和五十四年十月十六日に建設委員と若連総出で切り出した寺山の松材と、田光山の杉材が主に使われ、鈴木正雄を棟梁とする磯部正夫、高橋誠ら地元の大工が木取りに加わった。翌五十五年六月二十二日、地鎮祭を行なった後、地元の伊藤土建による基礎工事が進められ、七月一日の上棟式までこぎつけた。真壁前の小舞いかけは上棟式一週間後の日曜日に若連が出て行ない荒壁の準備を整えた。

小屋の大きさは間口二間半、奥行き三間半とし、後部に会所として九尺のひさしを出した。扉は鉄板の二枚扉で有隣の中村鉄工（中村福治氏）が請け負い、構造は日本瓦ぶき、真壁、内側は漆喰仕上げで断熱、防湿性を高めた。小屋は昭和五十六年九月、屋台の完成より丁度一

屋台小屋地鎖祭
昭和55年６月22日

屋台小屋の建前
昭和55年７月１日

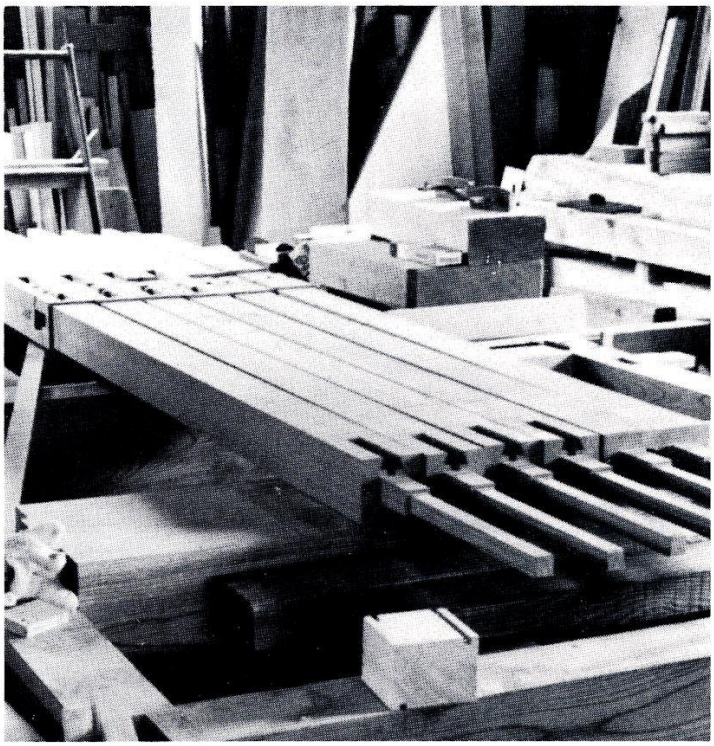
年早く完成した。完成した小屋は東向きで扉の内側は夏季に五十度にも達する。この断熱効果を高めるため最初グラスウールを張ったが、熱のために接着剤が利かず、完成二年後の昭和五十七年十一月三日、一日がかりで厚さ四十ミリの発泡スチロールを張り直し、下部（六尺高）は耐水ベニヤでスチロールを押えた。この屋台小屋も町民総力の結晶である。

完成披露へ

原木の木割りを終えた材料が屋台大工の仕事場に運び込まれると私は暇をみつけてはよく足を運んだ。最初のうちは柱材や土台材が積まれているだけでこれが屋台に変身してゆくなどとは想像もつかなかった。それでもカンナが入るたびにそれらしい形が現われ始め日一日と心躍る思いであった。桧材に比べ欅材は狂いやすく、そのために柱や土台、組物などは早くから手を入れて何度も何度も修整する過程をみると、成程、狂いのひどいものは新材と交換することもありうるのは嘘ではなさそうであった。屋台の重力を分散する役目を果たす三ツ斗組の構造は美的で理に合っているもので、組まれた外見から

前面隅　柱の組子
昭和56年３月１日

では想像できない工夫がこらされている。こうして組み物、柱、土台の順に作られ、二度目の製材以後は桧材も刻まれ始め、屋台はますます現実のものへと近づいていった。この頃から私は職場の帰りや日曜日などに足を運んでは大工と話を交えたり、知恵を拝借したりして日一日と成長してゆくような気がした。それはまるで自分が大工になったかのような錯覚すら覚える程であった。特に「割」というものは実に理にかなっているように思えた。化粧垂木ひとつをとっても「割」の狂っているものはないのである。



きれいに揃った6本の通し柱
昭和56年3月1日

一層屋台にとって唐破風の美しさは正に命ともいうべきものであろう。その唐破風も型板から材料に写され、いよいよ荒削りに入る頃では材料の肌からは到底あの優美なアウトラインは想像つかない。しかし、それは魔法使いの手にかかったように見事に変身して三月には美しい唐破風が姿を現わした。唐破風が完成するといよいよ仮り組である。仮り組は上棟前に一度行なわれて組み手に無理がないか点検するもので、暫く仮り組みの状態で様子をみる。仮り組みが解かれるといよいよ上棟を待つばかりになる。上棟式を翌日に控えた昭和五十六月八月九日、屋台小屋に運び込まれた屋台の部材の汚れ落としとワックス掛けが若連総出で行なわれた。白木の部材は目にまばゆいばかりに映る。真夏の強い日射しの中、額に汗を浮かべながら我が子のようにしてワックスを掛ける若連の顔には終日喜色が絶えなかった。ワックスは汚れから木を守るために掛けられたもので、ワックス自身の酸化による黄ばみを少しでも防ぐために一回だけにした。そして待ちに待った八月十日。朝八時から小池棟梁の指揮の下、五人の大工は土台から順次組み始めた。ありほぞに組まれた土台に掛け矢の音が響く。土台に柱が立ち、腰虹梁が組まれ、大工の一挙一動に皆は注目する。

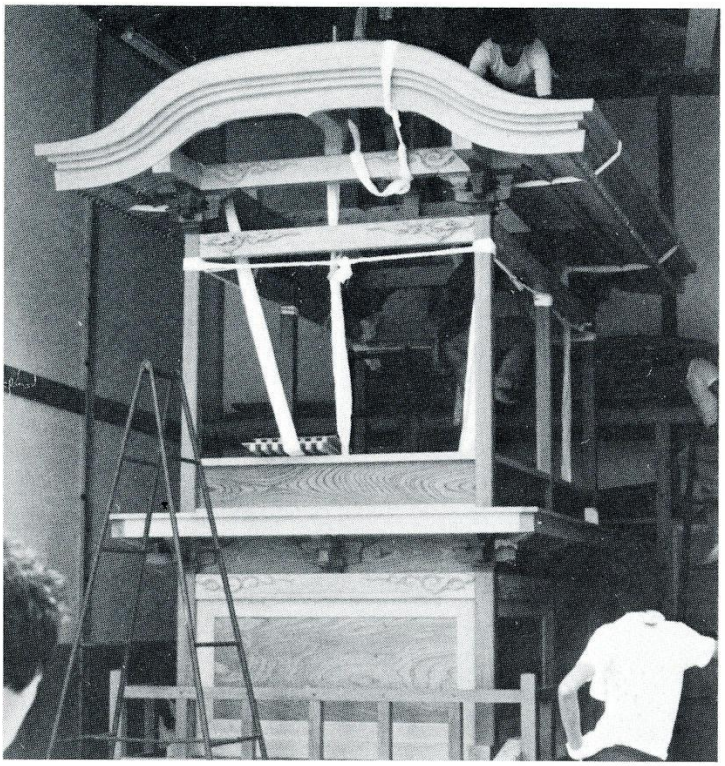
屋台小屋前に並べられた屋台部材
昭和56年8月10日

夢にまでみた屋台が現実の形となって現われてゆくのだからたまらない。私は時を忘れてその光景に見惚れていた。黄金色の軒が上がり唐破風がつくと屋台の姿は一段と際立ち、夕方には提灯掛けをつけ、飾り金具を打ってすべてを組み終えた。あれ程大きく見えた屋台小屋が小さく見えたのもこの時である。その夜、大工を交えて祝い酒を汲み交わし、皆の心はすでに初曳き出しの日へと心馳せていた。町内の人々から「立派な屋台だ」と言われると自分達が褒められているような錯覚を起こし、つい胸を張りたい気持になるから不思議だ。

その後、電気配線や飾りつけを済ませ、八月二十九、三十日の完成披露へとこぎつけた。当日は幸い天候にも恵まれ報道関係者も詰め寄せる中、氏神様の遷宮式の後、屋台の入魂式が行なわれ、小池棟梁には委員長有谷研三より感謝状と記念品が贈られた。その後、屋台は広場に曳き出され紅白の投げ餅や祝宴が催され、同席した浦部一郎氏や小池清氏を囲んだ記念撮影なども行なわれた。会場には念願の屋台完成にお互いに肩を抱き合って喜ぶ町民の姿さえみられた。全部の彫刻が完成するまでにはまだ年月がかかるが、屋台だけについていうならば本当に一日千秋の思いがここで一気に溢れ出たともいえそうな光景はいつまでも絶えることなく続いた。

祝宴もお開き近くになるといよいよ曳き初めである。曳き初めには七十歳以上のお年寄りを乗せ、老若男女問わずロープいっぱいに手をつなぎ、「新屋」隣保は有谷昭一郎宅まで引き曳み、次に「平」「中橋」と通れる道はどこも曳っぱり込んだ。そしてこれまでの苦労を一気に吹き飛ばすように、町民は二日間共終日屋台完成の喜びに酔いしれた。とにかくこの屋台完成は町民が知恵をしぼり、力を出し合って邁進した結果であり、この記録

は後世幾世代にもわたって大事に残してゆかねばならないと思う。そしていつの時代でもこれまでも苦労と感謝を忘れてはならない。



組立中の屋台
昭和56年８月10日

屋台完成を祝う区民
昭和56年８月29日

屋台完成の喜びにわく建設委員

昭和56年８月29日

乃組と共に屋台初奉納を祝う若連

昭和56年９月15日

屋台大工及び彫刻師の紹介

大工　小池　清

昭和四年九月、磐田郡掛塚町中町（現竜洋町）生まれ。坂田家から養子に出た父、小池佐太郎の次男として幼い頃から父の仕事場の木の香おりの中で育つ。数え年十三歳で実母を亡くし、その後東京の材木問屋に就職したが、父の病気でやむなく帰郷、二十六歳で独立し現在地（名塚町）に住む。病床の父の後を継いで棟梁として最初に手がけたのが浜松市植松町の屋台である。桃山美術の絢爛さを象徴した掛塚屋台大工の雄、坂田歌吉の子孫として現在も絶えまぬ努力と後継者養成に力を注ぐ。その作風は父の優美さに力強さが加わり、ひと際重厚さが漂う。

過去に手がけた屋台としては

乃組、梔組（宮口六所神社）
植松町、上新屋町、将監町（浜松蒲神明宮）
城下連、西古連（二俣諏訪神社）
請託社（笠井春日神社）
新栄社、泉湧社、宮組　中央町（磐田府八幡宮）
二之宮南（磐田鹿苑神社）
赤佐三区（浜北於呂神社）

彫刻師　浦部一郎　号清風、松寿

明治四十年愛知県八名郡（現豊橋市嵩山町）生まれ。十五歳の時嵩山町正宗寺に唐破風造り山門が建立され、それを見て感動したのがこの道に入るきっかけとなった。実家は農家であったが学校を卒業すると直ちに正宗寺山門の彫刻者高須宗信に入門。約九年の修業の後、昭和五年浜松市の現在地（元魚町）に住む。

修業時代は寺社仏閣の付帯彫刻を主としていた。昭和六年、一人立ちして初めて宮口研精社の屋台彫刻を手がけた。又、翌七年には津久美の彫刻も手がけている。こうして浜松に来てからは屋台彫刻を手がけるようになり、常に斬新なデザインを施して浜松の屋台彫刻のリーダーシップをとった。

過去に手がけた屋台彫刻としては

神立町、西塚町、子安町（浜松蒲神明宮）
倭魂社（笠井町春日神社）
板屋町、助信町、田町（部分）、元魚町、仲山町、諏訪町、伝馬町、海老塚町、天神町、池町、東伊場町（浜松祭り）
国方、中組、西組（浜松大窪神社）
小畑、本町、向市場（水窪町祭典）
中本町、西本町（大須賀町三熊野神社）

研精社、津久美、梔組（宮口六所神社）
田町（部分）（掛塚貴船神社）
この他、福田町にも三台ある。

梔組屋台工匠一覧（敬称略）

大工	小池清	浜松市名塚町
彫刻	浦部一郎	浜松市元魚町
幕	河合勘二	浜松市尾張町
車輪	和田猛	天竜市山東
ハンドル装置	内藤芳郎	浜北市於呂
金物	小滝欣作	愛知県岡崎市
提灯	寺田たか	浜松市笠井町
照明	太田節	浜松市西塚町

参考文献

掛塚屋台とお囃子　竜洋町掛塚祭屋台囃子保存会
飛騨の匠　第一物産株式会社
高山祭屋台雑考　長倉三朗著
高山祭の屋台　桑谷正道著
二俣のまつりと若連　沖次郎著
斑鳩の匠・宮大工三代　西岡常一、青山茂著
法隆寺を支えた木　西岡常一、小原二郎著
蘇る薬師寺西塔　西岡常一、高田好胤、青山茂著
第四回諏訪市文化祭立川展　諏訪市・諏訪市教育委員会
浜松凧生みの親椿姫観音・浜松凧・屋台　山崎源一著
遠州っ子・人・言葉・祭り・生活　ひくまの出版編
日本の祭り　山車と屋台　渡辺良正著
日本の美・やしろ　学研出版編

おわりに

私が物心ついた頃の六所神社の祭典は今以上に盛大であった。屋台こそ立派なものは少なかったが、宮口の町の通りを歩くにも人波をかき分けて進まねば前へ出られなかった程賑かであった。綿菓子、ヨーヨー、金魚すくいと夜店が両脇に帯になって立ち並び、屋台は残された道路の中央を往復した。だから破風と破風が当たりそうになったり、電柱に当たりそうになったり、スリリングなこともあった。六所神社においては社務所の前へ屋台の軒と軒の間をわずか三十センチ内外程あけて並び、屋根渡りさえも出来た。それ程ぎっしりとつめて並んだ。なぜなら当時は芝居があり、舞台の脇には花道までとりつけられ、六所神社は実に狭かった。芝居の幕間にはそれまでおさえられていた太鼓や笛の音が各組の屋台から一斉に流れ出し、私などは幕間を待ち遠しく思っていた子供達の中のひとりであった。宮口に生まれ、六所神社の祭りと共に生き、地元の祭りがいとうしく思われるのはこうしたかけがえのない歴史を見てきたからで、いい悪いは別にして「宮口の祭りは芝居があって夜明かしだ」としてこの辺では有名であったし、「これが宮口の祭りだ」というものがあったように思う。年番組になると実りの近い稲田の中の道をまだ明るい頃から町に向かって曳いていった憶えがあり、今ではとても懐しく思われる。祭り囃子ひとつにしても、道中囃子、宮囃子、馬鹿囃子の他、組独自のお囃子もあって今よりも素朴であったように思う。

高度成長期を境にこの貴重な文化の伝承がおろそかになり、太鼓をたたかせれば一番、笛を吹かせれば一番という人も出なくなった。まだ小学生であった頃、祭り当日小学校のすぐ東にあった尚義団の屋台小屋の扉が開けられて、若連による祭りの準備を授業の合い間に見て心躍ったのがつい昨日のように思われる。祭り一週間前になると太鼓が出され、学校が終わると一目散に家に帰って太鼓をたたきに公民館に行った。ある時は家にも帰らずランドセルを背負ったままで太鼓をたたいたこともあった。それ程祭りは子供心に待ち遠しいものであり、楽しみでもあった。また祭り当日、町の通りで行き交う尚義団や研精社の屋台を見ては「いい屋台がほしいな」と思ったのも確かである。しかし、まだ老朽化した屋台がある中で梔組の屋台はいい方で、新造など歴史がひと回りもふた回りもしても到底考えられないことだった。まして祭典が衰退した一時期などは屋台などは負担になり、出

来るなら無い方がいいと思われるほどの変わりようで新造など夢物語も同然であった。そんな時代でも私はやっぱりいい屋台がほしかった。幸いにして温故知新の波に乗って再び屋台ブームが押し寄せ、歴史のない地区でも屋台を新造して祭りに花を添える時代となり、宮口のような元来屋台祭りの地区にとって火をつけられたようなことになった。

まず初めに途中で屋台をなくした乃組が新造し、次に段組とあ組、そして井組、栃組が新造することになった。この勢いは異常な程であった。夢にまでみた屋台の新造が私の生きている時代に実現し、しかも微力ながらその建設に参画させていただいたことは私にとって望外の喜びである。栃組の屋台も新造してはや五年。今でも我が子のように思えるし、若連をぬけた将来においても数々の思い出が祭典と共に走馬燈のように私の脳裏をかけめぐることであろう。しかし、宮口の祭りの良さを少しでも多く後世に残し伝承してゆくことが今生きている私たちの役目であろうと思う。どこの祭りにも許されていい、いわゆる歴史やしきたりを重んじる一種独特の頑固さがあるように、六所神社の祭典がすべて時代の流れに迎合してゆくことは必ずしもいいとは思わない。むしろその中に祭りのよさが、あるいは心髄があるように思う。どこの祭りも既製品であったならこれ程無駄で味気のないものはないであろう。今からでも失なわれつつある昔のしきたりを再興して六所神社の祭典の味を甦らせたいと思っているのはあながち私ひとりではないであろう。ぜひ、この屋台祭りが恒久に変わらずに受け継がれてゆくことを望んでやまない。

最後にこの「あゆみ」を作るにあたり、法隆寺及び薬師寺宮大工西岡常一氏をはじめ、屋台大工小池清氏、彫刻師浦部一郎氏、植松町元屋台建設委員稲垣正紘氏、天竜市在住安間正男氏等多くの方々の心暖まるご助言をいただいたことを厚く御礼申し上げます。微力ながらこの一冊が歴史の一コマとして残るならば幸せです。勝手乍ら区民の敬称を略させて頂いた事、ご海容下さい。

屋　台　材　木　控

樹種	名称	数量	樹種	名称	数量	樹種	名称	数量
欅	大土台	2	桧	茅負	2	桧	下駄箱枠(小)	4丁
〃	同、妻土台	2	〃	裏甲	2	〃	〃鴨居	1丁
〃	同、中土台	1	〃	小裏甲	2	〃	根太	6丁
〃	前車持土台	1	〃	葺地	2	〃	引出摺材	6丁
〃	後車持土台	2	〃	茨垂木	28	〃	腰板蟻木	5丁
〃	前送金具取付	1	〃	野垂木	48	〃	屋根枠材	3
桧	二重土台	2	〃	高欄儀星柱	4	〃	〃合掌	10
〃	同、妻土台	2	〃	半儀星柱	2	欅	上組子三ツ斗組	6箇所
欅	柱	6	〃	平桁(大)	2	〃	腰組子半組	5箇所
桧	丸桁	2	〃	〃(小)	1	〃	〃柱付	6箇所
〃	妻梁	2	〃	地覆(大)	2	〃	〃柱隅	2箇所
〃	中梁	1	〃	〃(小)	1	〃	持送	2枚
〃	前後虹梁	2	〃	架木(大)	2	〃	肘掛板裏	1枚
〃	横虹梁	4	〃	〃(小)	1	〃	小壁板	5枚
〃	腰固メ	3	〃	升束	11	桧	肘掛板	5枚
〃	根太掛	4	〃	多々良束	16	〃	軒天井裏板(大)	2枚
〃	前、腰虹梁	1	〃	縁板(大)	2	〃	〃(小)	2枚
〃	横、腰虹梁	4	〃	〃(小)	2	〃	腰天井(大)	2枚
〃	野桁	2	〃	縁葛(大)	2	〃	〃(小)	1枚
〃	野棟	1	〃	〃(小)	1	〃	茨垂木上	25枚
〃	化粧棟	1	〃	〃(小)	1	欅	脇障子板（彫刻）	2枚
〃	化粧束	3	〃	蟻木(大)	2	〃	下駄箱口板	2枚
〃	野桁束	2	〃	〃(小)	8	桧	箱材	3枚
〃	桔木	1	〃	腰板枠(大)	2	〃	底板	12枚
〃	肘掛・敷居(大)	2	〃	〃(小)	8	〃	棟通(大)	2枚
〃	〃(小)	4	〃	〃(小)	10	〃	〃(小)	1枚
〃	肘掛土台(大)	2	〃	唐破風	2枚	杉	床板(大)	10枚
〃	〃(小)	4	欅	駒寄土台	2丁	〃	〃(小)	2枚
〃	脇障子柱	2	〃	〃笠木(大)	2丁	〃	野屋根板	4枚
〃	半障子柱	2	〃	〃笠木土台	1丁	〃	腰板ベニア貼物	5枚
〃	地つり	2	〃	〃笠木(小)	1丁		建具〃	1枚
〃	笠木	1	〃	〃親柱	4丁			
〃	化粧垂木	256	〃	〃子柱	23丁			
〃	木負	2	桧	下駄箱枠(大)	2丁			

梔組　屋台新築のあゆみ
発行日　昭和六十一年九月十五日
発行者　中村博次
浜北市宮口三九六〇
印刷製本　㈱杉山印刷
浜松市上新屋町一〇八